

## 一 般 演 題

### 1. Ascending diaschisis の一例

藤田 英明 宍戸 文男 菅野 巖  
 犬上 篤 日向野修一 田畑 賢一  
 上村 和夫 (秋田脳研・放)

左側小脳半球に出血性梗塞をきたした59歳女性、発症1か月および22か月後に<sup>18</sup>F-FDGとHEADTOME III (FWHM 8 mm)を用いてCMR-Gluを測定した。ポジトロンCT像上に全脳で70か所に関心領域を設定し、各領域ごとにCMR-Gluの変化率(%)を算出した。左側小脳半球では、1回目に対し2回目は51%とCMR-Gluの著明な低下を認めた。一方、大脳半球では、右側110±10%、左側105±14%とCMR-Gluの増加傾向を示した。しかし、右側inferior frontal gyrusの円蓋部および右側precentral gyrus, postcentral gyrusの外側領域では97%と減少傾向を認めた。このような現象は、一側の小脳半球の障害によりtractus dentatothalamicsおよび視床からのprojection fiber等を介する対側大脳皮質への遠位効果と考え“ascending diaschisis”と命名した。

### 2. <sup>123</sup>I-IMP 脳血流 SPECT によるパーキンソン病の検討

小田野幾雄 樋口 正一 木村 元政  
 酒井 邦夫 (新潟大・放)  
 石川 厚 (同・神内)

加療中のパーキンソン病20例を対象に、<sup>123</sup>I-IMP脳血流SPECTを施行し、動脈採血法による脳血流量を測定した。その結果以下の事項が判明した。パーキンソン病のsupratentorial CBFは全体に低下した(平均22%の低下)。特に前頭葉皮質の低下が著しい(平均29%の低下)。脳萎縮の程度とCBFの低下とはよく相関した。stageならびに病期と基底核のCBFの低下には有意な相関がみられた。痴呆の程度(長谷川式スコア)と前頭葉皮質のCBF低下、または頭頂葉皮質のCBF低下との間には、有意な相関は得られず、パーキンソン病の痴呆はCBF低下以外の原因によるものと推測された。

Alzheimer病を合併したと思われる1症例があった。<sup>123</sup>I-IMPによるCBF測定は、パーキンソン病の診断・経過観察に有用である。

### 3. 虚血性脳病変の脳血流とCO<sub>2</sub>反応性について ——Xe-133 吸入法 SPECT による評価——

駒谷 昭夫 山口 昂一 虻 眞弘  
 高梨 俊保 堤 玲子 (山形大・放)

X-CT上明らかなLDAのないTIA, RIND 32例のrCBFをXe-133吸入法SPECT(HEADTOME SET021)にて測定した。同じ日に5%CO<sub>2</sub>混合空気によるCO<sub>2</sub>負荷試験も行い、脳血流低下域と健側のCO<sub>2</sub>反応性を調べた。TIA, RINDの脳血流は、健側においても健常者に比し有意に低く、終末呼気CO<sub>2</sub>濃度との相関は健側、血流低下域ともにきわめて乏しかった。しかし、脳血管抵抗(CVR)とは有意の負の相関が認められた。一方、脳血流のCO<sub>2</sub>反応性は、健側では健常者に比し有意に低かった。血流低下域では逆に高い場合もあり、特に、血流が低い所ほど大きくばらつき、一定の傾向は認められなかった。

### 4. Pick 病, Alzheimer 病の SPECT 像

——<sup>133</sup>Xe-rCBF 像との比較を中心に——

虻 眞弘 駒谷 昭夫 高梨 以美  
 星 俊子 堤 玲子 (山形大・放)

<sup>123</sup>I-IMP SPECT 像におけるPick病, Alzheimer病の低集積部位について<sup>133</sup>Xe吸入法rCBF像と比較検討した。IMP像はXe像と比べコントラストが低く、IMP像のカットオフ値を13.7%に設定すれば、健常部の低集積域である白質の灰白質に対する割合がXe像と一致、同様のコントラストが得られるので、今回の検討ではIMP像のカットオフ値を13.7%とした。対象はPick病6例, Alzheimer病9例で、装置はリング型SPECT HEADTOME SET021を使用した。

Pick病の半球に対する前頭葉の集積低下の割合は、Xe 83.5±9.6%, IMP 83.6±14.6%で有意差なく相関係